

なきごえ



1981

4

大阪市
天王寺動物園協会

木下陸男

○鹿の棲む郷。(フィールドノートより)



能勢地方の早春は降雪こそないものの、日によっては、あたり一面が真白になるほどに霜柱が立つ、市内と比べると4~5度は気温が低い。

午前5時、能勢の郷は茅葺屋根の先端を残して深いもやにしずんで

いる。村里から離れてしばらく行くと、水田はやがて栗林にかわり、トタンのシシ垣が二重三重に引き回された農道に出る。

シシ垣にそって続く足跡をたどると、やがて1本の細いけもの道となる、けもの道は白いアセビや鮮やかな紅色のミツバツツジの花が林縁をかざるクスギ・コナラの林をぬけ、コゲラやシジュウカラの飛び交う赤松林へと続いている。

“ビョッ”突然するどい叫び声が空気を震わす、「シカだ！」……純白の尾絨が樹間をかすめる……一瞬の出会いであった。

○もう一つの動物園

日本の哺乳動物は、昔から様々な形で私達と深くかかわり合ってきた。その土地に棲む動物にとって周りの自然環境と共に人間社会の直接、間接の影響のもとに生存して行かなくてはならなかった。

したがって、そこにどんな動物が棲んでいるか？という事は、逆にそこでどんな人間生活が営まれて来たかといった重要な証しとなる。

赤松林とその周辺に広がるクスギ、コナラ、アベマキ等の薪炭林は、今最も開発の激しい所である。シカを始めとするキツネ、タヌキ、アナグマなどの大・中型動物は主要な棲息場所であるこの“里山”の開発によって決定的な打撃を受けることとなった。

かつて農耕民族であった私達の祖先は、このいわゆる里山を介して多くの動物達とかがわりを持ち、民話や伝承、文化にまで昇華させた。そこは人と動物、人間と自然との接点でもあり、緩衝地帯でもあった。

人と動物とのかかわりといった意味では、里山は美しく機能的に展示された近代的動物園とは異った、より自然な“もう一つの動物園”であったといえる。私達が昭和52年から始めたナチュラルリスト講座は、この“もう一つの動物園”がフィールドとなっている。

○動物との会話を求めて、

様々な職業、考え方の人々が「動物」をテーマに双眼鏡、折り尺、ルーペ、フィールドノートといった七つ道具を肩に、動物達の残していった生活の証しを求めて野山を駆けまわると

足跡、食痕、糞、けもの道などのフィールドサインを一つ一つたねねんに調べる事によって、動物達がどんな生活をしているかを知り、深い愛情と科学的探究心によって動物達の代弁者になるために頑張っている。

ナチュラルリスト達は、自ずからの体験によって絶滅の危機にある動物達の生活の実態を科学的に把握し、滅びつつある動物を救い、ひいては人と動物との共存、人間と自然とのかかわり方についても考えて行こうとしている。

○心の中の自然

私が子供の頃、イヌワシの棲む氷ノ山の麓で育った。山畑で祖母からよくこんな話を聞いた。

「ある年、夏は日照り、冬は大雪と不作が続き、一粒の米もとれなかった、人々はヒエとアワで喰いつないだがそれも尽きた、多くのとしよりや子供が飢えて死んだ、死んだ子供達は鳥になってヒュー、アワーと鳴きながら毎年秋になるとこの山畑にやって来る」そう云いながら畑の角に一房のアワを残していった。昭和21年私達も貧しかった。

(大阪自然環境保全協会理事)

4月号なきごえもくじ

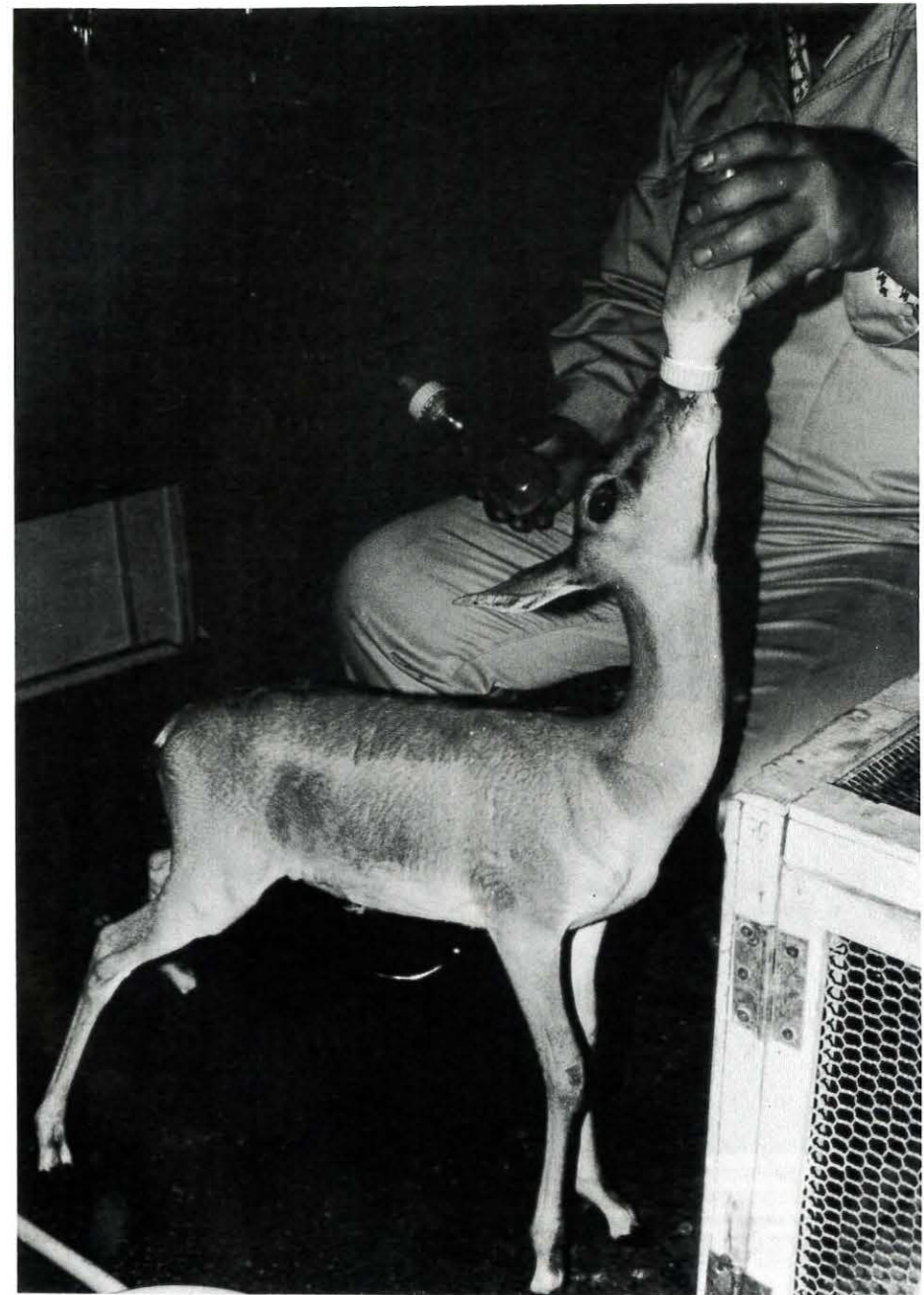
動物と私 2
“ブラックバックの人工哺育” 3
動物園グラフ・動物園日記 4-5
ポイラーマンの思い出 6-7
天王寺のどうぶつたち (28) 8-9
北米通信員だより ④ 10
動物園ニュース 11

表紙の写真説明

“コブハクチョウ”

くちばしのつけ根にこぶがあるのが一つの特徴で、原産地は北ヨーロッパですが古くから飼いな

(撮影：柴田 総)



“ブラックバックの人工哺育”

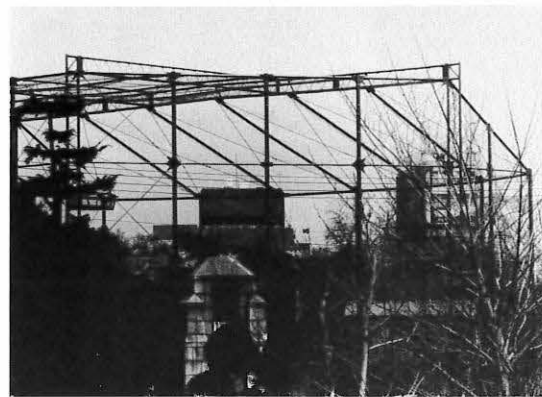
1月24日、ブラックバックの赤ちゃん(メス)が誕生しました。母親が世話をしないため人工哺育で育てることにしましたが、ブラックバックの人工哺育は日本で初めてのことで

(撮影：宮下 実)

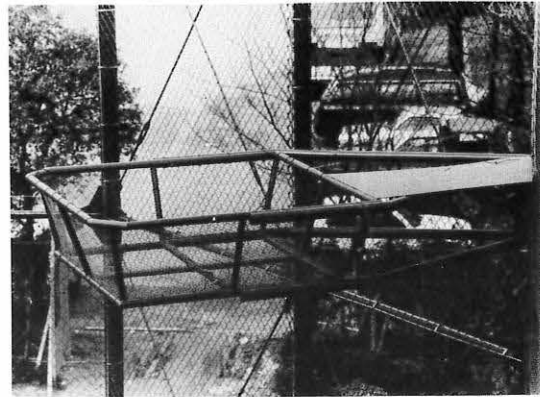
動物園 グラフ

コウノトリ舎

建築面積 330,7㎡
高さ 13m



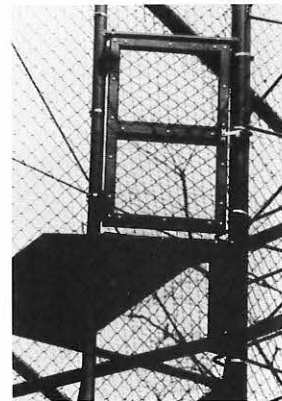
日本一のコウノトリ舎



巣台：安全と安定を確保 100kgの負荷に耐えます。



仮収容室：翼、頭を傷めないため天井にサランネットを



点検口：これで巣材上げの作業も安全になりました。

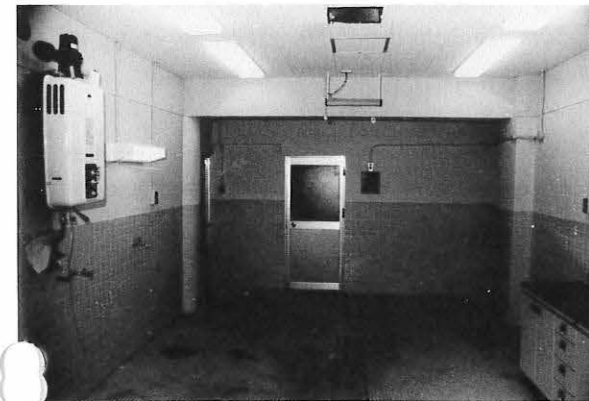
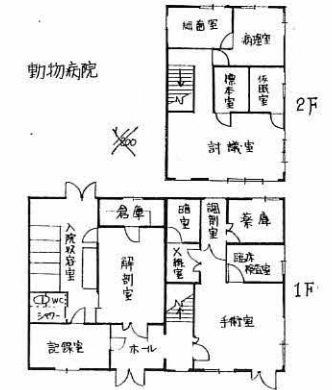
4月より装いも新たに2施設が完成しました。
○1つはコウノトリ舎……日本の空にコウノトリが飛翔する姿を夢見て安全で住みよい鳥舎を作りました。2世の誕生がたのしみです。
○もう1つは動物病院……西日本一の規模を誇りなお一層の検査・治療体制が充実します。全室冷暖房で入院検疫動物にとっても良い環境となりました。
(撮影：中川 哲 男)



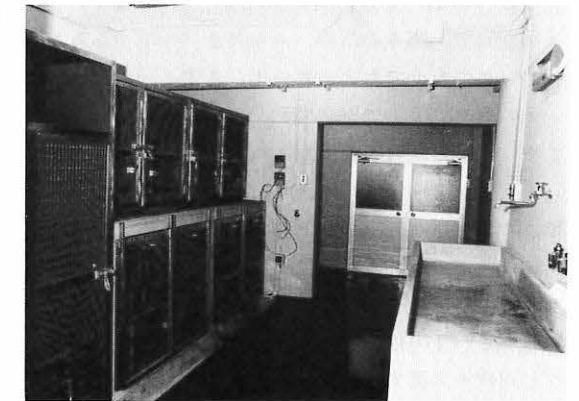
2ヶ年にわたる新築改修工事も終了西日本一の規模となりました。

動物病院

建築面積 165㎡
延床面積 241㎡



解剖室：照明換気広さも十分です。



入院収容室：各室にフローアーヒーティングを設け居住環境も抜群です。

2・3月の動物園日記

- 2 / 16. 当園で初めて生まれたエミューのヒナの餌付けが、本日から始まりました。
17. 第3卵目のエミューの卵がふ化しました。
18. トラの仔が順調に育っています。
19. シマウマの寄生虫を駆除するために投薬しました。
近畿ブロック飼育者講習会が岡山の池田動物園でありました。当園からは、飼育係3人が出席しました。
20. ニューカッセル病のワクチン接種を、キジ舎、放養舎、南園クジャク舎の鳥たちに行ないました。

21. トラの仔2頭の離乳を始めました。生まれてから、きょうで31日目です。エランドがモウコガゼル舎フェンスにぶつかり負傷したので、治療をしました。
22. コツメカワウソが、再び脱肛したので、すぐ手術を行い入院させました。
23. エミューの第6卵、第7卵がふ化しました。
24. キバシズメバトが死亡しました。
北園水禽放養舎の巣材上げが行われました。
26. タンチョウのヒナを、今まで両親といっしょにいたツル舎より水禽放養舎に移しました。
ネゴジステンパーのワクチンをジャングルキャット、ベンガルキャット、アライグマ

- ゴールデンキャット、オセロット、ハナグマ、計14頭に接種しました。
27. 冷えこみがきつく、池など各所で結氷し、水道管が2つ破裂しました。
3 / 1. コヨーテがかわいい仔を3頭出産しました。パタスザルの雌が、雄のためにあまり食べ物をえることができずやせ、衰弱がひどくなってきたので、治療し別の暖い収容舎に入れて飼うことになりました。
3. 佐世保動物園よりお借りすることになった雄のオセロットが到着しました。検疫後、当園の雌のオセロットと同居させ、繁殖を目ざすことになっています。
5. フタコブラクダの仔が早朝に生まれました。

- 全身が泥まみれで冷えきり死にそうだったので、全身の泥を湯でふき取り、その後乾燥させました。その処理で仔は元気を取りもどしました。
6. ワシミミズクが右翼を骨折したので治療しました。
7. 先日生まれたフタコブラクダの仔が、不安定ですが、やっと立つことができました。
10. カッシュクペリカンの雌が死亡しました。
11. オオヤマネコとオセロットがそれぞれ1頭、王子動物園より寄贈されました。
14. ユリカモメが1羽保護されてきました。翼を骨折していたので修復固定手術を行い入院させました。

ボイラーマンの思い出

— 動物と共に30年 —



私が、天王寺動物園にボイラーマンとして戦後初めて採用されたのが、昭和25年の4月のことでした。

当時、戦後、初めての熱帯動物でもあり、子供たちが待ちこがれていた

「ゾウ」が入園するというので、同僚であった西河昭君と「ゾウ」の暖房のため採用された訳です。

戦後そのままの「ゾウ」舎があり、又、ボイラーも戦前そのままのものがありませんでしたが、長い間、使用されていなかったため、ホコリまみれになっているのを、2人で缶体整備をしたり、配管などの整備点検をしたものです。

そして、間もなく「ゾウ」が入園しました。それが今の「春子」です。体重は約500キロ位の小さな「ゾウ」で、寒さのため、よく体をブルブルふるわせていたのを今でもよく思い出します。

その頃は、2人で24時間勤務の交替で休日返上してやっと6月から本務採用となりました。

「ゾウ」と一しょに入園した、ニシキヘビや手長猿、インコなどの暖房は北園のそれぞれの動物舎に収容されたので、これらは石炭ストーブで暖房をしていました。

しかし、その後、チンパンジーやワニ、ライオンなどが続々入園するにつれストーブが、戦前から設置されていたコルニッシュ型ボイラーに変更され運転を始めました。これも3年程、使用すると使用不能になり、新しく石炭焚きのケワニー型ボイラーを新設することになりました。

この頃の思い出を一つ、二つ……。

北園の動物の暖房は殆んどこのように石炭焚きのボイラーになり、各動物舎に配管され、スチームにより暖房される訳ですが、先に書いた小鳥舎だけは、たった1ヵ所、昔のままの石炭ストーブを使っていました。

当時の小鳥舎は、今の東門の近くにあつてボイラー室から遠く離れており、小鳥舎というより、古こけ

た15㎡ぐらいの木造の小屋で、あばら家同然でした。

その頃、園内の照明電灯は数える程しかなく、深夜、真暗闇の中を懐中電灯を持って、2時間おきに石炭をくべに行くのです。周囲は真暗闇、懐中電灯で照らしながら、小鳥舎の扉を開ける、辺りが静かで鍵をあげる音と扉のあけ締め音だけである。やがて、真暗な室内を懐中電灯で照らしながら、ストーブの灰を落し、石炭を入れ、温度を記録して帰ろうとすると、突如後から、「コンバンワ」、途端に頭から水をかけられたように全身が身の毛も逆立った思い出があるのですが、犯人はモノ真似上手なインコで、その後も、予期していくのですが、暗闇中の「コンバンワ」にはその都度、心臓が止まる思いでした。

これは私だけでなく、初めて小鳥舎に入った人は皆、ビックリさせられたものです。

又、石炭焚きの時代、ボイラーの燃焼室をかき廻す毎に、顔から足の先まで灰で真黒になったり、灰捨場にモッコで1日何回となく灰を捨てたり、今と比較するとほんとに重労働の連続でした。

又、風の強い日、缶を焚いていると、黒い煙がモクモクと煙突から出て、お客さんの顔や着物をかすめて嫌がっている様子を見たときは、ボイラーマンを止めようかと思ったこともあります。時には、園内に白い雪ではなく、真黒なススが雪のように落ちてきて、水禽舎の白いアヒルが、黒アヒルになって、びっくりしたこともありました。

そうかと思うと、近所の新世界の住民から洗濯物が、前の日に干して朝見ると、黒いススが一杯ついたり小言を頂戴したことも度々ありました。なるべく、ススが出ないように気をつけて焚くのですが、風の向き、強さで仲々思うようになりません。特にカバのプールには生蒸気を送るため、一時に無理焚きする事もその原因の一つで、何れにしても之れには神経を使ったものです。

しかし、このような苦情や被害も昭和37年に「煤煙排出の規制等に関する法律」が制定され、このため、セクショナルボイラーに変わり、燃料も石炭から重油になってから、ススも殆んど出ない様になりま

した。

もう一つ苦労したのは、ワニの暖房です。当時は今の様に適温の湯を送るのではなく、直接、生の蒸気をプールに送るのです。



この時、必ず、時間を計って蒸気を送らないと、例えば、他の作業をやりながら送ることは絶対禁物で、何故なら、他の作業をしていて蒸気弁を締め忘れたならば、ワニは忽ち、ユデワニになるからです。

又、キリンの暖房にも苦労しました。昔のキリン舎は建物が高く、そのため、今のように室内ファン（温風を送る装置）がある訳でなし、上は暑くても下は寒いという状態で、よくキリンを夜中に、追いかけて廻し空気をかく伴したものです。おまけに、大きな扉が4枚もついていてその隙間から冷たい風がしのび込んできます。寒さが厳しく室内温度が仲々上らない夜などは、戸の隙間に、ワラ束を差し込んで詰めるなど苦労したものです。

困ったのは、チンパンジーやゴリラの風邪引きの時です。昼夜共、2時間おきに必ず、各動物舎においてある温度計を見廻りに行き、温度が上っている時は、送気を中止し、下っている時は送気して常に一定の適温を保つ訳です。一番の高温は「爬虫類館」で、常に27、28度、カバやサイやキリンは15、16度です。チンパンジーも入園当初は22、23度に保ちますが、段々、環境になれるに従って温度を下げていきます。入園して2、3年も経つと大概の動物たちは、気候に順応して寒さに強くなっていきます。

さて、チンパンジーやゴリラは、よく風邪を引きます。特に秋から冬にかけて気候の変わり目によく引くのです。時期は10月中旬から11月頃にかけて。その頃は暖房開始の頃で（毎年ボイラーは10月1日から翌年の5月の半ばまで運転）気温の1日の変化が激しい時で、最も暖房に気を使うときです。

こんなとき、昨日まで元気だったチンパンジーが

朝から急に、ゴホンゴホンとセキをしたり、ハナをたらしたりして風邪を引くことがあります。こんな時に限ってボイラーマンも風邪を引いている時です。「チンパンジーの風邪は君達がうつしたのヤロ」とか、「送気の具合が悪かったのとチガウカ」とあらぬ疑いをかけられることも度々ありました。

勿論、冗談ですが、こんな時はほんとに気を使いました。



ボイラー室の前で

入園後30数年たった今でもゾウの「春子」「ユリ子」や、かつての人気スターのチンパンジーの「シュジー」それに「コンバンワのオーム」など共に苦しく貧しい時代を乗り越えてきた動物たちが元気で暮していることが私の今の最大の喜びです。

どうか、これからも、元気で1日も長く永生きして下さい。それだけが私の願いです。

終りに、私たちの仕事は、動物園では縁の下の力持ち、おまけに変則勤務で、しかもボイラー運転期間中の病気が一番辛いのです。少しの熱或は、腹痛でも辛抱して出勤しなければならないのが宿命です。それがためには、体が一人倍丈夫でなければ動まらない仕事です。

今、動物と暮して30年、6名の同僚ボイラーマンと別れを告げる時、今までの御支援に感謝すると共に呉々も体に気をつけて下さる様、祈りたい気持ち一杯です。

第2の人生を歩むに当って、不安と期待で何んとも複雑な気持ちです。どうか今後共動物共々、よろしく願いする次第です。

（前天王寺動物園飼育課ボイラー勤務

：西田 恒 雄）

ホッキョクグマ



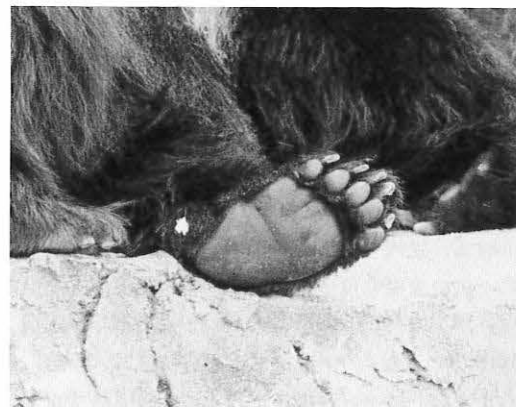
§ はじめに

すっかり春になり、日曜祝日の動物園の人出は大変なものです。ライオン、ゾウ、キリンといった人気スターの前は何重もの人垣ができています。なかでも人気を集めているのが昨年暮に北海道の旭川と西独からやって来たホッキョクグマのユキオとユキコです。2頭共1才と少力で、今が可愛い盛りの子熊達です。さしずめ“歩くぬいぐるみ”といったところでしょうか。

§ シロクマではありません

ホッキョクグマはその名の通り北極圏を中心に分布しています。よくシロクマと呼ぶ人がいますがこれはまちがいです。というのは普通アメリカクロクマの白変種やツキノワグマの白化したものをシロクマと呼ぶからです。ツキノワグマの白変種は以前から新潟県で時々発見されていたようで、1832年(天保3年)に生捕りされたという古い記録もありますし、1968年には4、5才のオスが仕留められています。またこの近くで捕えられたシロクマが1895年頃から1930年まで上野動物園で飼われていたことがあ

るそうです。



§ エサについて

分布している北極圏は他に住む動物の少ないとても住みづらい所のように思えますが、そんな中でホッキョクグマ達は泳ぎが上手なことを活かしてアザラシ、イルカ、クジラの仔などの水棲哺乳類やタラ、オビョウといった魚を主食としているそうです。(ペンギンは食べません。ペンギンがいるのは南極です)特にアザラシは大好物だそうです。最大 800kgにもなるというあの巨体を維持するのは大変なことだ



と思います。ホッキョクグマの学名 *Thalarctos maritimus* は海にすむ海のクマという意味で、この学名が示すように泳ぎはとても上手なのですが、陸上ではそれ程敏捷ではないようで、せいぜい鳥の卵や小哺乳類辺りが食糧だそうです。また食肉目に属するにもかかわらず生えている地衣類なども食べるようです。以前いたホッキョクグマにはニンジンなども与えていましたが、よく食べるものの翌日の便の中に殆んどそのまま歯型もあらわに出ていました。こんな状態で果して栄養として役立っているのでしょうか。今、ユキオとユキコには1日に鯨肉 5kg、クマ用ソーセージ 2.4kg、ミルク 6ℓ、パン、ビタミン剤などを与えています。

§ 寒さと氷への適応

ホッキョクグマの特徴はやはり厳しい寒さに適応している体の構造でしょう。まず毛皮は二層になっ



ています。上毛は水に入ったりすると濡れますが、その下の下毛は非常に密に生えている上、油気も含んでいる為決して水を通しません。ですから氷の海に入っても体の芯まで水に濡れることはないのです。そして皮膚の下にはとても厚い脂肪層ができています。この脂肪層はエネルギー源になると同時に

効率の良い断熱層にもなり外の寒さが体にこたえない仕組みになっています。これらの特徴は多かれ少なかれ寒い地方に住む動物の特徴ですが、このホッキョクグマやアシカ、アザラシ類で特に著しいと言えましょう。

また、手足の裏の蹠球部以外には短い毛がピシリと生えています。これは山スキーをする人が板の裏にアザラシの毛皮を貼ったりするのと同じ原理で、氷上でのスリップ防止に大変役立っています。

§ 母と子

普通冬ごもりというクマが代表選手のように思われていますが、このホッキョクグマは冬ごもりをしません。南へ移動するだけでいつもと変わらない生活をしているようです。ただ妊娠したメスだけは雪



の中に穴を掘ってそこにこもって出産を待ちます。1、2頭の仔が11月から12月頃生まれますが、生まれた時は500~800g程でミニウサギ程の大きさです。この子供達を母親は冬ごもりする前にたくわえておいた皮下脂肪だけで飲まず食わずで育てます。そしてイヌ程の大きさになる3月から4月頃穴から出て来るのですが、ホッキョクグマは交尾期以外は夫婦別居生活ですから母親は子供が一人前になるまで1人で面倒を見なければなりません。

日本の動物園では現在約90頭のホッキョクグマが飼われていますが、この中で日本で生まれたものはユキオを含めてたったの4頭です。赤ん坊は結構生まれているのですが育つのが大変困難だからです。世界的に見てもホッキョクグマの繁殖は少なく、繁殖のむずかしい動物のひとつとされています。ユキオとユキコが早く大阪の水に慣れて動物園3世を作って欲しいものです。

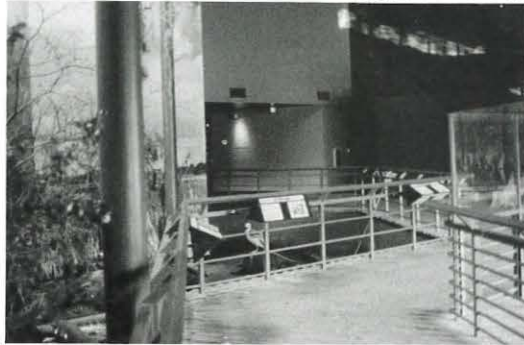
(長瀬 健二郎:飼育課 獣医師)

北米通信員だより ④

アトランタ動物園を後にして飛行機で3時間、次の目的地のオクラホマ州のタルサ空港に着くと思いがけずも迎えてくださったのはタルサ市動物園次長の日本でも有名な川田健氏でした。川田氏についてはまた回を改めて御紹介したいと思います、スケールの大きな、かつとても知的な方です。

§ タルサ市動物園

川田氏が会議出席のため早朝の園内を1人でまわりました。この動物園は53年の歴史をもつものの一見、ふつうの地方動物園で見なれた動物達が朝寝を楽しんでいました。ここでは珍種を揃えるより繁殖に力を入れているとのこと、同園収容動物の種に対する繁殖率は35%を超えているとのこと、昨年生まれたホッキョクグマの aurora やチンパンジーの Penny (母親は人工哺育だったが立派に育てたとのことです!!) もその例です。しかしここで忘れてならないのは、川田氏の御尽力により一昨年開館した北米生態館の存在です。これは「北極圏ツンドラ館」

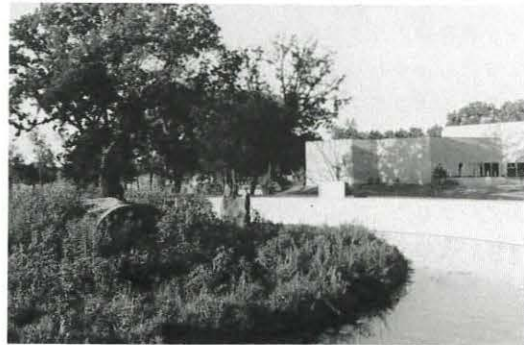


北米生態館の「東部森林館」内景

「東部森林館」、「南部低地館」及び「南西部砂漠館」と命名された4つの建物が、放飼場を見渡す渡り廊下で連結されたもので、博物館と動物園を合体させた全く他に類を見ない、川田氏の自ら評される「先鋭的な動物園」、私の思ったところの「理想的な教育施設」であります。館内は全く博物館のようで写真や展示物が多く並んでいて、各地域のインディアン文化など人類学的見地からも展示がなされています。ただ、あちこちの窓の外、そうして時にはすぐ足元、目の前にそれぞれの地帯を代表する生きた動植物が豊富に見られることで入館者に生態系という総合的なイメージを与えることをねらったもので、行く先々でオオヤマネコ、ガラガラヘビ、アリゲーターがいたと思うと、小鳥が頭上をかすめたり、大水槽が目前に現われたりし、さまざま工夫が凝らされていました。舞台裏も見せていただきましたが管理も合理的になされています。1つの動物園の未来像がそこにありました。他に、昨年開園したアフリカ・サバンナ園がよくできていることをあげたいと思います。子供動物園もなかなか立派です。

(追記)

先日(%)秋休みにセントルイスに行った際、途中でタルサ動物園を再訪し、川田氏に久々にお目にかかることができました。2時間と限られた時間ではありましたが、動物病院他、北米館、サバンナ園など案内していただくことができました。その前週に、川田氏の発案で「ゾウの安全管理に関する研究会」というのを催したところ、全米14園から18人の専門家を集めることができ初めての試みとしては大成功だったとのことでした。園長のズッコーニ氏とも再会して、動物病院を訪問しました。さっそく獣医のラッセル氏に内部を御案内いただきましたが、たい



手前はチンパンジーの放飼場、向う側は北米生態館へん機能的で管理の行き届いた、まだ新しい施設で付近で保護されたという白色ペリカンが印象的でした。次にクマ舎の裏を見せていただいた後、サバンナ園に直行しました。ここは東アフリカの生態を再現したもので草食動物数種とダチョウが見られ、処々に氏のアイデアになる工夫がありました。表からは見えない柵の外の動物舎は、内部にひっかかるものがなく、安全性を重視したものと言えます。北米館は博物館好きの園長の発案になるものだと思います。千里の国立民族学博物館をほうふつとさせます。今回は、このそれほど広くないところでホッキョクグマを繁殖させた秘訣や、爬虫類、魚類を館内で飼う設備を見せていただきました。動物園としての配慮が活かされており、この超近代的施設を人工的すぎるとして批判する人も何人か知っていますが、私は高く評価されるべき、世界初の試みと考えます。ちなみにここでは園が教育施設、事業を管理運営し、それと全く独立して子供動物園があります。(市の人口38万人、年間入園者数は27万人)

(つづく)

(大阪動物園ボランティアズ会員：富樫史朗)

動物園ニュース

§ 放養舎の巣材あげ

2月25日に、3月末からのシュバシコウの産卵にそなえて毎年恒例の放養舎の巣材あげが行なわれました。6つの巣台に巣材として、新しい柳の枝をあげました。地上から5~8mの位置にある巣ですので危険も多く、作業が終わるまで約1時間もかかりました。新しくなった巣で今年もたくさんさんのヒナが誕生することでしょう。

§ オセロット入園!!

3月4日、佐世保市亜熱帯動植物園から大望のオセロットのオスが入園しました。

当園では長い間メス1頭を飼育していましたので、適当なオスを捜していましたが、今回佐世保動



まり、動物園は大忙しです。

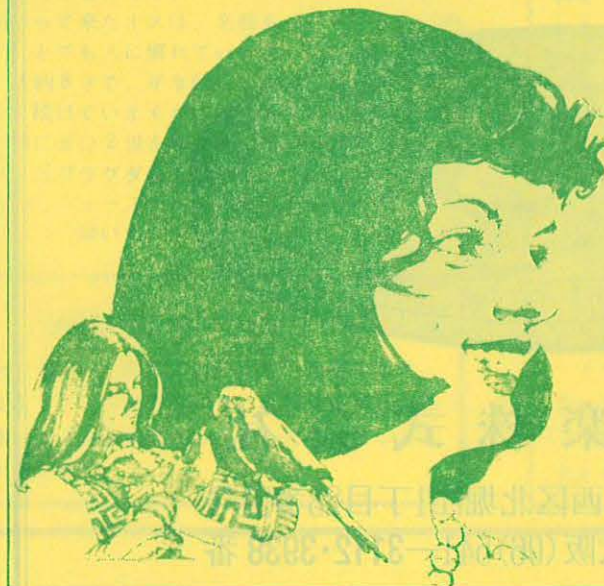
このフタコブラクダはメスの赤ちゃんで、3月5日の早朝に生まれたのですが、母ラクダがまだ4才で初産であったうえに前日が雨だったために、係員が発見したときには、泥まみれで虫の息の状態でした。早速、暖かい部屋に収容し、泥をお湯で洗い流したあと、強制的に哺乳しました。しかし、生後2~3日間は自力で立つことがなかなかできず、哺乳量もあまり増加しませんでしたので心配しましたが、生後20日あまりたった今では体重も増加し、足どりは少し不安ですが元気に走り回っています。



§ 新着動物

オセロット以外にもいくつかの新着動物がありました。3月14日には神戸市の王子動物園の御好意によりオオヤマネコのオスを1頭いただきました。中型で四肢が長く、耳の先に黒いふさ毛がある美しいヤマネコです。検疫終了後3月19日から小獣舎で展示していますのでぜひごらん下さい。また3月13日にはオセロットの雌成体のヤギ2頭の客贈りも

くらしを彩るショッピング



近鉄百貨店

アベノ店 (06) 624-1111・上本町店 (06) 779-1231
東京近鉄 (0422) 21-3331

・近鉄百貨店グループ

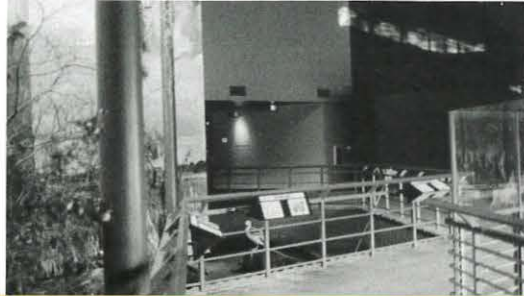
大阪(アベノ・上本町)・東大阪・奈良・京都・岐阜
枚方・四日市・和歌山・徳山・別府・東京(吉祥寺)

北米通信員だより ④

アトランタ動物園を後にして飛行機で3時間、次の目的地のオクラホマ州のタルサ空港に着くと思いがけずも迎えてくださったのはタルサ市動物園次長の日本でも有名な川田健氏でした。川田氏についてはまた回を改めて御紹介したいと思います、スケールの大きな、かつとても知的な方です。

§ タルサ市動物園

川田氏が会議出席のため早朝の園内を1人でまわりました。この動物園は53年の歴史をもつものの一見、ふつうの地方動物園で見られた動物達が朝寝を楽しんでいました。ここでは珍種を揃えるより繁殖に力を入れているとのこと、同園収容動物の種に対する繁殖率は35%を超えているとのこと、昨年生まれたホッキョクグマの aurora やチンパンジーの Penny (母親は人工哺育だったが立派に育てたとのことです!!) もその例です。しかしここで忘れてならないのは、川田氏の御尽力により一昨年開館した北米生態館の存在です。これは「北極圏ツンドラ館」



(追記)

先日(%)秋休みにセントルイスに行った際、途中でタルサ動物園を再訪し、川田氏に久々にお目にかかることができました。2時間と限られた時間ではありましたが、動物病院他、北米館、サバンナ園など案内していただくことができました。その前週に、川田氏の発案で「ゾウの安全管理に関する研究会」というのを催したところ、全米14園から18人の専門家を集めることができ初めての試みとしては大成功だったとのことでした。園長のズッコーニ氏とも再会して、動物病院を訪問しました。さっそく獣医のラッセル氏に内部を御案内いただきましたが、たい



動物園ニュース

§ 放養舎の巣材あげ

2月25日に、3月末からのシュバシコウの産卵にそなえて毎年恒例の放養舎の巣材あげが行なわれました。6つの巣台に巣材として、新しい柳の枝をあげました。地上から5~8mの位置にある巣ですので危険も多く、作業が終わるまで約1時間もかかりました。新しくなった巣で今年もたくさんさんのヒナが誕生することでしょう。

§ オセロット入園!!

3月4日、佐世保市亜熱帯動植物園から大望のオセロットのオスが入園しました。

当園では長い間メス1頭を飼育していましたので、適当なオスを捜していましたが、今回佐世保動植物園の御好意で3年間の期限でお借りすることになりました。最近、動物園間で絶滅に瀕している動物の繁殖のために、動物を貸し借りすることがよく行なわれるようになりました。今回のオセロットもその一環としてお借りすることになりました。オセロットはその毛皮がたいへん美しいために乱獲され非常に少なくなっている動物ですので、ぜひ繁殖させたいものです。今回やって来たオスは、名前を“レオ”といい約7才で、とても人に慣れています。当園のメス“パトラ”は約8才で、年令的に丁度よく現在おり越しに見合を続けていますが、相性はよいようです。この3年間にぜひ2世を誕生させたいものです。

§ フタコブラクダの人工哺育
先月号のニュースでお知らせしましたブラックバックとトラに続いてフタコブラクダの人工哺育が始

まり、動物園は大忙しです。

このフタコブラクダはメスの赤ちゃんで、3月5日の早朝に生まれたのですが、母ラクダがまだ4才で初産であったうえに前日が雨だったために、係員が発見したときには、泥まみれで虫の息の状態でした。早速、暖かい部屋に収容し、泥をお湯で洗い流したあと、強制的に哺乳しました。しかし、生後2~3日間は自力で立つことがなかなかできず、哺乳量もあまり増加しませんでしたので心配しましたが、生後20日あまりたった今では体重も増加し、足どりは少し不安ですが元気に走り回っています。

§ 新着動物
オセロット以外にもいくつかの新着動物がありました。3月14日には神戸市の王子動物園の御好意によりオオヤマネコのオスを1頭いただきました。中型で四肢が長く、耳の先に黒いふさ毛がある美しいヤマネコです。検査終了後3月19日から小獣舎で展示していますのでぜひごらん下さい。また3月13日にはトカラ列島の臥蛇島産のヤギ2頭の寄贈がありました。まだ2頭とも6ヶ月令のかわいい仔ヤギです。

◎編集部からのお知らせ!!

来月号より“読者のコーナー”を作ります。「なきごえ」をお読みになった感想や意見、動物園に対する希望などありましたら、どしどしお寄せ下さい。

お知らせ

◎動物園入園料の改定について

天王寺動物園では、4月1日より動物園入園料を今まで大人 200円から 300円に改定されました。中学生以下は現行どおり無料です。

動物園入園料

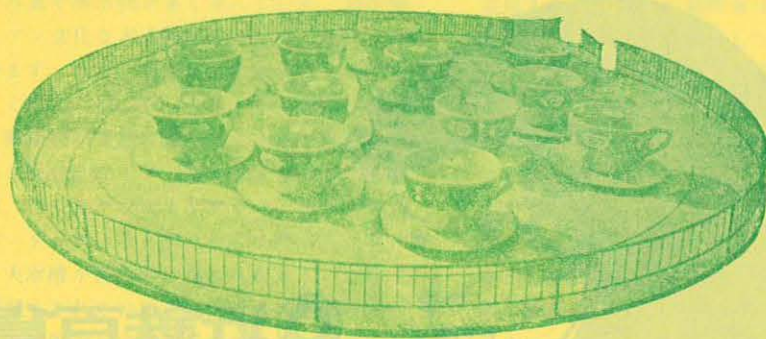
普通	大人(高校生以上)	300円
団体	30人以上	270円
	50人以上	240円
	100人以上	210円

なお毎月第3月曜日は休園日です。7月までの休園日は下記のとおりです。

4月20日(月)、5月18日(月)、6月15日(月)、7月20日(月)。

開園時間は9時30分から5時で、4時に切符売止めになります。

遊園施設委託経営・製作・販売



久竹娛樂株式会社

本社 工場 大阪市西区北堀江1丁目23番21号
電話 大阪(06)541-3112・3938 番

なきごえ 昭和56年4月15日発行(毎月1回15日発行)

編集/大阪市天王寺動物園

発行人/大阪市天王寺動物園協会 和田辰巳

印刷所/株式会社 松村善進堂 定価100円(送料共)

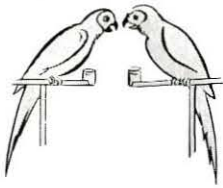
第17巻 第4号(通巻187号)

〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74

電話 大阪 (06)771-0201

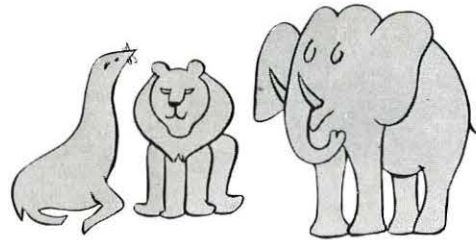
振替口座 大阪 37823

1年継続(12部)1,100円(送料共)



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達



- ・医学実験用動物
- ・愛玩犬、猫直輸入
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・教材用鳥獣剥製販売
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券150円・鳥獣価格表100円

有限会社 吉川商会

本社 神戸市生田区中山手通三丁目二八番地 電話(078)221-8195・221-1517
 飼育場 神戸市葺合区神仙寺通三丁目一番地 電話(078)241-3494



自然の
おいしさ

全糖

- 合成甘味料・合成保存料・合成糊料・合成着色料はっさい含まれていません。



雪印ヨーグル

各130cc.=90円

パイン・オレンジ・ストロベリー・フルーツカクテル

編集委員

橋本 一郎・土井 良彦・榎本 照・中川 哲男・宮下 実・長瀬健二郎・藤原 安昭・森本 泰利・大野 尊信
 萩谷 文彦・農本 武志・野口 秀高・仲谷 登・高橋 真三・坂野 健一・石島 宏胤・柴田 純